

料金後納

ゆうメール

MACNEWS

〒616-8156

京都市右京区太秦西野町20

TEL 075-871-0374. FAX 075-882-3777

Eメール mac.terakoya@gmail.com

URL <http://www.mac-terakoya.com>

今月号の内容

※ 我慢をさせることの重要性

※ 子供達のウソ

「あっ、やられた！」

何の話って ですか？

生徒に注意しているときに、

見事にウソをつかれたのです(>_<)

この頃の子どもってウソをよくつきますね！

言い訳もうまい！ 口だけは本当に達者！！



「〇〇、今日は風邪で休みますって」

「えっ、3時過ぎに自転車で走り回っているのを見ましたよ」

「お母さん、優しすぎるね。自分の子の歩いている道、前に回って石を退けているのと同じや。自分で躓かせて気づかせなければならぬのにね。」

優しさも大切ですが、それ以上に我慢させることのほうが大切です。

新聞のコラムにも載っていました。

対話の中で、「子供の時から、親に甘やかされて育ち、嫌いな食べ物を我慢したことがない。だから、大人になってからも好き嫌いが多く、仕事でも我慢できず、頑張れないのですよね」と。

子供達には、幼稚園の頃から、空いている電車でも座らせないなど些細なことの積み重ねにより我慢することを学ばせなければなりません。

子供の時に我慢すればするほど社会に出てから頑張れるのです。

偏食の多い子には、偏食でない子に比べて好奇心や意欲、自主性などが消極的だという調査結果が出ており、身体の影響としては、食欲不振、肥満、発育の問題、下痢や便秘、そして病気にもなりやすくなるそうです。

また、子どもの頃の偏食は将来の健康までも左右すると言われており、身体のみだけでなく、人格の発達にも影響を及ぼし、癩癪を起こしやすい、協調性がないとの調査結果も出ているそうです。

またこんな話も、食べ物の好き嫌いが多い人は人の好き嫌いも多いと、企業の面接で言われ、落とされた人もいたそうです。

人間関係も味覚も、幼児のように自分にとって心地よく甘いものばかりを本能的に選んでいくと、積極的に交渉できなかつたり、他人の気持ちを押し量ることが苦手な大人になってしまうとのこと。

子供の食べ物の好き嫌いをなくすには、まず親が範を示すべきなのは言うまでもありません。

読書離れも我慢力不足が原因

「国家の品格」の著者、藤原正彦 お茶の水女子大学理学部教授の説によれば、

我慢力不足は読書離れの原因でもある。テレビや漫画などの映像に比べ、一つずつ活字を追う作業は、我慢力を要するからである。

40年～50年前までは、ほとんどの家庭が貧乏で、子供は誰もが、おやつが欲しくても我慢をしましたし、ご飯が欲しくても辛抱しなければなりませんでした。その上、どの子も家での役割があり、ご飯を炊いたり、風呂焚きをしました。

今日の豊かな社会では、子供達は欲しいものをふんだんに与えられ、働かされることもありません。当然、我慢力がつくことはありません。

以前、「うちの子は、切り絵が苦手なので、させないで欲しい」とある保護者に言われ、絶句しましたが、なぜ？ このような過保護な言動をとられるのか理解できませんでした。

ところが、前述の藤原教授によれば、

このような言動の根底に「個性の尊重」という考えがあるとのこと。これにより、「宿題は嫌

い」「テレビ漬けやゲーム漬け」「野菜は苦手」も皆個性として大目に見られる。「ゆとり教育」も、勉強したくない子供の個性を尊重するがゆえの産物であると。

そして、単なる甘やかしやおもねりが、個性の尊重という美しい言葉の魔力により、子供への「理解ある態度」へと変貌していると。

子供の良い個性を伸ばすのは当然ですが、当然悪い個性もあります。それを正すのが、躰教育なのです。

子供の個性は、鍛えないと野生のままになってしまいます。鍛えるために躰教育があるのです。その過程で我慢力を身に付けると考えています。

子供は、時には厳しく対応してやらないと、楽な方へ楽な方へと行ってしまいます。大人でも、自分に厳しくしないと楽な方を選択してしまいますからね。

よくある保護者の対応に、子どもに任せてますからというのがありますが、無責任というほかありません。

以前にも書きましたが、教育学者の森信三先生は「つのつく年齢までは「挨拶、返事、靴並べ」を徹底するようにと躰の重要性について述べられていますが、残念ながら、MACでもこの「あたりまえ」の行為の出来ている子が、とても少ないのです。

ところで

生徒から私たちがつかれる嘘は、

- ・宿題をしてこなかった時
- ・入室時間に遅れてきた時
- ・答案直しの時（直しが済んでいないのに直したと）
- ・誤答をした時（間違っていたのに最初から正答を書いていたと…この場合、最初の答えは何々と書いてあったと、こちらが言えなければ謝る破目に陥ります）
- ・中学生ではテスト結果を持ってくる時（点数の改ざんなど）

また、忘れ物をした時や、育脳トライアルの感想文の提出を忘れた時も、全く悪びれることなくニコニコ笑いながら「忘れた！」と言いに来ます。

「いつ持ってくるの？」と問うと、「出来たら次来るときに持ってきます」とのたまいます。

勿論、「そんな時には、次には必ず持ってきますと言うんや」と、厳しく指導しますが (>_<)

大人の世界でも一流ホテルでのメニューの虚偽表示が、連日報道されましたが・・・ご家庭ではどうでしょうか？

一番ダメなパターンは親がウソに気づかないことです。

自分のウソが通ると、以後子ども達は平気でウソをつくようになります。やはりきっちり叱らなければなりません。

子どものウソを減らす物語の一つに、イソップ寓話の「羊飼いの少年とオオカミ」があります。

もう一つは、「ワシントンの桜の木」です。

どちらの物語がウソを減らすには有効だと思われますか？

カナダの教育学者の実験では、「羊飼いの少年とオオカミ」では、この話を聞いてから子ども達のウソは少しも減らず逆に少し増えたというのです。

一方、「ワシントンの桜の木」では、少年のウソが75%、少女では50%減少したのです。

このことから何を学べば良いのでしょうか？

この教育者によれば、「**幼い子ども達は親を満足させるため —— 喜ばせるためにウソをつく**」とのこと。だから、**真実を聞かされるのが一番嬉しい**と話してやれば、親が喜ぶのは真実ではなく好ましい話だという、子どもならではの考え方に一石を投じることが出来るのです。

子供がウソをついた時の普通の親のパターンは、叱る。

良い親は、なぜウソをついたのかを子供と一緒に考える のです。

子供のつくウソの種類は、大体次の3つに分けられます。

- ・ **自分の失敗や過ちをごまかそうとするウソ**

教室では、ほとんどがこれに該当しますが、育脳トライアルの感想文の保護者欄を自分で書いてくる子もあり、その努力に対して、1回のみ許しています。

- ・ **本当は「こうだったらいいな」という願望からつくウソ**

- ・ **親の関心を引くためにつくウソ**

子どものウソを頭から叱ってしまうと、今度は隠すようになりさらに巧妙にウソをつくようになりますので、ウソをついた背景に何があるのかを詮索しなければなりません。親の期待が、子供たちのプレッシャーになっていることが多いのです。

親の関心を引くウソには、「おなかが痛い」とか「ものがなくなった」などと騒いでいる場合で、不安や寂しさに起因しているケースが多いことを留意してください。

子供たちのウソは、親の対応にも起因していることも多々あります。

- ・ 子供に頼まれたことをうっかり忘れていた
- ・ 親子での約束が守れなかった

こんな場合、

言い繕ったり、

逆切れしていませんか？ 「仕事が忙しかったから、しかたないでしょ」とか。

「ごめんなさい」と明確に謝る姿勢を子供に見せましょう！！

「スペインは世界でただ一つ、死を自然な光景とみなす国だ。」——ガルシア・ロルカ

「マドリッドは不思議な町、誰でも初めて行ってとても好きになる。」——ヘミングウェイ

オラ(Hola) 前回紹介したモロッコからジブラルタル海峡を渡れば、私が好きな情熱の国！——スペインと聞いて連想するのは、闘牛やフラメンコでしょうか？

それともガウディのあの大建築？ あるいはバルサやレアルなどのサッカーチーム？

この九月には、首都マドリッドが東京と五輪開催地を争ったばかりです。

そのさらに前には高速列車・脱線事故というのもありました。

古くは宣教師のザビエルや、伊達政宗が派遣した慶長遣欧使節団などで、日本とも縁の深い国です。(なんでも“ハポン japon(=日本)” 姓を持つ、サムライの末裔の町があるとか)

とにかくこの国は、イタリアと並んで魅力満載、多彩な観光分野の宝庫です。——文化・歴史・宗教・芸術・建築など、多方面で充実していて飽きさせません。

期待に胸ふくらませ私が行ったのはちょうど秋口、首都からラ・マンチャ～カタルーニャ～アンダルシア地方まで、同伴女性と三週間ほど、ジプシーのように気ままに旅して回りました。“風の足”で、10都市以上巡っただろうか。そのどれもが個性的でそれぞれに素晴らしい！

かのプラド美術館を擁するマドリッドはじめ、ダイナミックな芸術都市のバルセロナ、グレコが愛した古都トレド、オレンジとパエーリャの本場バレンシア、あるいはアルハンブラ宮殿が残るグラナダ、カルメンの都セビーリャ(セビリア)、瀟洒な回教寺院の町コルドバ。

その他、離宮のアランフェスにエル・エスコリアル、化け島、国境の港町、風車の田舎町など....。

なかでも特に印象深かったのが、ガウディのサグラダ・ファミリア教会でのこと。
当時も建設中だった現場で、監督主任をしておられる彫刻家・外尾悦郎氏の知己を得、一般人は立ち入り禁止の工房を案内してもらいました。メディアで見かける通り、ダンディな紳士の御仁で、若輩の同胞にも真摯に応待してくれました。

海外で活躍されてる日本人と会うのは、やはり嬉しく誇らしいものです。

このように、スペインには観光ネタが豊富にあり過ぎて、その魅力を短い紙面ではとても書き尽せません。以下、私の個人的関心で注目、鑑賞、あるいは歴訪した対象を、ジャンル別に軽く列挙していこうと思います。旅行の際の、ご参考にでもなれば。

[文化]

闘牛) マタドールとの『真実の瞬間』で終わる三幕劇。宗教的儀式であり且つ娯楽的な見世物。

やはり一見の価値あり。男性なら、血の疼きを覚えるかも。

フラメンコ) ジプシーのロマ族が踊るサクラモンテの洞窟内で見したが、ここはあまりよくない。

素人目にもマズい踊りで、場末のダレた雰囲気漂う。

とはいえ、昔日の栄華と凋落を寂しく残した、グラナダの街にはお似合いか。

シエスタ Siesta) 日本語で言う「午睡」の習慣があり、昼間は軒並み店が閉まる。

バル Bar) 居酒屋・食堂・喫茶店等をかねた便利な酒場。夕方からバルを巡って、ハシゴ酒。

美食) サン・セバスチャンやビルバオ、ゲルニカの町など、美味な料理で有名なバスク地方。

三大祭り) 有名なパンプローナのサン・フェルミン祭(牛追い祭り)、火祭りのファリャなど。

サッカー) スタジアムで観戦、リーガ・エスパニョーラ。

今や、メッシやクリ・ロナなどの活躍は言わずもがな。

文学) 何といってもまずは『ドン・キホーテ』(by セルバンテス)。風車の町は実在します。

ドン・ファンは、スペインが生んだ「女たらし」の典型的人物。

カルメンは、もう一方の極で「情熱の女」の典型。

フラメンコを踊るこの熱いジプシー女性は、仏文学者メリメによって創始された。

他にセビーリャ生まれの近代詩人ベッケルに、

グラナダ生まれの現代詩人・劇作家のガルシア・ロルカ。

小説家では、ミゲル・デリーベスやノーベル賞受賞者のカミロ・ホセ・セラ

今日活躍している作家に、フリオ・リヤマサーレスなど。

因みにヘミングウェイは、『日はまた昇る』に始まって何かとスペインに縁が深いアメリカの作家。

宗教) たいいていの都市には立派なカテドラル(大聖堂)がある。

レオンの都からガリシア地方~世界的な巡礼地のサンティアゴ・デ・コンポステーラまで。

信仰の山・モンセラットの修道院に祀られた「黒衣の聖母」。

《以下、次号に続く》